

10/29(月)

## 坪井直さん死去

# 核廃絶への信念忘れぬ

核の業火に焼かれ、死に直面した体験から発せられたメッセージを改めて、胸に刻みたい。

広島・長崎への原爆投下から76年、被爆者運動の牽引役がまたひとり、「亡くなった。坪井直さん、96歳。核兵器廃絶を国内外で訴え、「ヒロシマの顔」と呼ぶことやむじい人だった。

被爆者の全国組織・日本原水爆被害者団体協議会の代表委員として15年前、広島を訪れた当時のオバマ米大統領と対面した姿が記憶に新しい。

原爆慰靈碑の前で固い握手を交わす。ケロイドが残る顔に笑みをたたえつても眼光は鋭く、杖をもつ左手でオバマ氏を指さしながら訴えた。

「アラハのあれ（約束）が残つともばかじや」「被爆者は、あなたと一緒にがんばる」

09年、オバマ氏が「核兵器なき世界をめざす」と誓つたアラハ演説。その実現しそが、被爆

者が何よりも願う総意であると伝えた時間だった。

学生時代に被爆して大やけどを負い、意識不明のまま終戦を迎えた。九死に一生を得て、戰後は中学教師に。まだ被爆者の多くが沈黙する中で「ピカエン先生」と名乗り、教え子に体験を語り聞かせた。

国に放置された被爆者が立ち上がり、日本被団協を結成したのは1956年。核軍拡が極まる米ソ冷戦以降、草の根の証言活動に国内外で粘り強く取り組み、坪井さんも先頭に立った。

「核兵器は絶対懲」と「ネバーギブアップ」だ。

核兵器を持ち合ひ」とで均衡が保たれるとする核抑止論に対し、核の非人道性を繰り返し説いた。核軍縮が連々として進ま

ないのも、決してあきらめではない」という情熱と信念を示す。その姿勢は若い世代の心もつかみ、被爆者と若者が手を携えて核廃絶を訴える取り組みを広げた。活動は国際的なうねりとなり、4年前の核兵器禁止条約の誕生につながった。

条約は今年1月に発効したが、核保有国は背を向け続け、世界にはなお1万3千発以上の核兵器がある。「核なき世界」への一歩をどう踏み出すか。来年1月に核不拡散条約（NPT）再検討会議が、3月には核禁条約の締約国会議が予定され、唯一の戦争被爆国である日本も真価が問われる。

どうわけ核禁条約への姿勢である。政府は「保有国と非保有国の橋渡しをかる」と言いながら、締約国会議へのオバマーバーー参加に慎重な姿勢を崩さないあまりだ。岸田首相は再考するべきだ。坪井さんの思いを正面から受け止めねばならない。